

哲學研究

第百五十一號

第十三卷
第十冊

睿智的世界

西田幾多郎

一

判斷的知識が一般者の自己限定であるとするならば、我々が何物かを考へるには、一般者が自己の中に自己自身を限定すると云ふことがなければならぬ。私は一般者に三種の段階を區別することによつて、三種の世界といふ如きものが考へられると思ふ。判斷的一般者に於てあり、之に於て限定せられるものが、廣義に於て自然界と考へることかでき、判斷的一般者を包む一般者、即ち判斷的一般者の述語面の底に超越するものを包む一般者（即ち自覺的一般者）に於てあり、之に於て限定せられるものを意識界と考へることができ。更にかゝる一般者を包む一般者、即ち我々の意識的自己の底に超越するものを包む一般者に於てあり、之に於て限定せられるもの

が睿智の世界と考へられるものである。

睿智の世界といふ如きものは、我々の思惟を超越したものでなければならぬ、如何にして我々がかゝる世界を考へ得るであらうか。何物かを考へるといふことが一般者の自己限定であるとするならば、如何なる一般者の自己限定によつて、睿智の世界といふものが考へられるのであるか。私は意識の志向作用に基いてかゝる世界を考へ得ると思ふ。我々の意識作用は一方に於て實在的と考へられると共に志向的である、ノエシス的なると共にノエマ的である。而してその志向する所のものは、單に所謂意識内容に止まるのではなく、超意識的内容である。私の意識作用が過去の意識内容を志向する如き場合は單なる内部知覺とも考へられるであらう。併し我々の意識作用は我々の意識を超越したものを志向するのである、否、意識せられると否とに關せず、それ自身に於てあると考へられる永遠の眞理といふ如きものを志向するのである。我々の意識作用が斯く志向せられるもの、即ちノエマの方向に於て超越的であると考へられると共に、作用的方向即ちノエシスの方向に於ても超越的と考へられねばならない。單に時間的なものは志向的であることはできない、所謂意識現象は志向的であつても、それが尙時間的と考へられるかぎり、超意識的内

容を志向すると云ふことはできない。超意識の内容を志向するには、我々の自己は所謂意識的自己を超越せなければならぬ。例へば、我々はカントの意識一般の立場に於てのみ、眞理を考へ得るのである。かゝる場合我々の意識作用は心理的自己に属するものとして意識的實在性を有するのではなく、意識的自己の奥底にある超越的自己に属するものとして、その實在性を有するのである。

右の如くにして我々の意識を超越した叡智的世界といふものが考へられるとするならば、かゝる世界を限定する一般者は我々の意識界を限定する一般者を超越し、之を内に包む一般者として、自覺的一般者に準へて考へることができらうであらう。

二

自覺的一般者とは如何なるものであるか。我々が自覺に於て自己といふものを意識し、かゝるものを考へた時、その自己とは判断的一般者の超越的述語面を越えてあるものでなければならぬ。それは判断を自己限定の過程となす判断的一般者の中に於て限定せられないものでなければならぬ、之に於て限定せられるものは單に考へられたものであつて、考へるものとして考へられたものではない、判断の内

容となるものであつて、判斷するものではないのである。私といふのは、時空的に限定せられた個物の底に考へられた個物である。かゝる個物が考へられる以上、かゝる個物の於てある場所がなければならぬ、かゝる個物を限定する一般者がなければならぬ。而してかゝる一般者はもはや判斷的一般者といふことはできない、判斷的一般者を包む一般者でなければならぬ。自覺的なものが之に於てあり、之に於て限定せられるの故を以て、私はかゝる一般者を自覺的一般者と名づけるのである。かゝる自覺的一般者の構造は如何なるものであらうか。

判斷的に自己自身を限定するものが具體的一般者であるとするならば、具體的一般者は自己自身の中に自己自身の内容を限定する限定面を有つ、それが抽象的一般者と考へられるものである。是故に抽象的一般者は主語となつて述語とならない個物的なるものゝ述語面的統一と考へられ、具體的一般者に於てある個物的なるものゝ一象面を映すものとして抽象的と考へられるのである。併し一般者其者の立場から云へば、それは一般者が直に自己自身を限定する限定面と考へることができ、自己自身の影を映す射影面と考へることができ、一般者が一般者を含むといふ意味を現すものと云ふことができるであらう。判斷的一般者が自覺的一般者の中

に包まれると考へられた時、判斷的一般者の超越的述語面と考へられたものは、今は、自覺的一般者が自己自身の内容を映す自覺的一般者の限定面となる。向に判斷的一般者の超越的述語面に於てあるものとして、具體的と考へられ、實在的と考へられたものは、抽象的となり、單に意識せられたものとなる。自己自身を意識するもの、即ち自覺的なものが、「於てあるもの」の意義を有し、判斷的一般者の内容として之に於てあつたものは、すべて意識内容として非實在的となる、實在の意義が對象的存在の意義から意識的作用の存在の意義に變するのである。判斷的一般者の形式によつて云へば、自覺的なものが主語となつて述語とならない實在の意義を有し、判斷的一般者に於てあるものはすべて述語的意義を有するものとなるのである。斯くの如き意味に於て、判斷的一般者の内容をその儘に、意識内容となす自覺的なものが知的自己である(判斷的一般者に於ける第二本體に當るものと云つてよい)。知的自己とは自覺的一般者に於てあるものとしては、尙自己自身の自覺的内容を有せない形式的有たるに過ぎない。此故に知るといふことは知られたもの、その内容に何物をも加へないと考へられる、唯知られたもの、その者の存在の意義を變するものである。

私は是に於て意識の特徴と考へられる志向作用の如何なるものなるかを明にし得ると思ふ。自覺的一般者が自己自身の内容を限定する自己限定面に於てあるものは、判斷的一般者の超越的述語面に於てあるものとして、一方に對象的存在と考へられると共に、それは知的自覺の意識面に於てあるものとして意識的存在でなければならぬ。併し知的自己の意識面に於てあるものは、尙自己自身の自覺的内容を有せないといふ意味に於て、かゝる意識面に於てあるものは尙自己自身の内容を限定し、自己自身の内容を映すものではない、却つて自己自身を超越したものの内容を映して居るのである。例へば色の感覺といへども、物理的光線ではなく、意識現象として自覺的有でなければならぬと共に、その内容は自己意識を超越した色自體といふ如きものでなければならぬ。知的自己の立場に純なれば純なる程、その内容は超越的となると共に、その意識的實在性は形式的となる、意識は單に映すといふ如き意味しか有せない、かゝる關係を志向作用といふのである。意識を働くものとして考へるから作用と云はれるのであるが、純なる知識の立場に於ては、作用自身の内容といふものは入つて來ない、作用其者は反省せられない、如何に色の知覺が個別化せられても、その内容は何處までも對象的たるを免れないのである。自覺的なるものの自身の内

容が意識せられるには、自覺的一般者に於てあるものゝ意味が深められねばならない、自己の中に自己を映すといふ自覺的有の意味が現れて來なければならぬ。而してそれが可能となるには、我々は知的自己の立場から意志的自己的立場（作用の作用の立場に移り行かねばならぬ）従つて我々の意識面も單に判斷的一般者の超越的述語面といふ意味から獨立して、自己自身の内容を映す自覺的意識面といふ意味に變じて行かなければならぬのである。判斷的一般者の中に含まれると考ふべき抽象的一般者が、單に自己自身の限定を含まない一般者と考へられるのと、それが述語面的統一と考へられるのとは、異なつた意味を有たねばならない。前者に於ては、不完全ながらもそれ自身が一般者の意義を有し、後者に於ては單に「於てあるもの」の媒介面と考へられるのである。一般者が自己の中に自己を限定するといふ意味が深くなればなる程、その限定面は前者の意味から後者の意味に移つて行く、かゝる意味に於て自覺的一般者に於ては、知的自己の意識面から意志的自己的意識面に到るのである。無論、それは何處まで行つても、自覺的一般者に於てあるものとして、志向的といふことを失はないであらう。例へば、色の意識内容が想起とか想像とか種々のノエシスによつて變せられるのみならず、意志によつて欲せられたものとなるにし

ても、尙それは一種のノエマと考へることができであらう、そこにも尙志向せられたものといふ性質が存するであらう。併しかゝる意識内容は單なる志向作用のノエマではない、單なる知識の立場に於て見られるのではない。若し之をしも志向作用によるとするならば、先づ作用自身を志向すると云ふことがなければならぬ、ノエシスがノエマとなる、意識が意識を意識すると云ふことがなければならぬ。私は斯く二種の志向性、二種の意識を考へる代りに、判斷的一般者に於て判斷がその限定作用と考へられる如く、すべての意識作用を自覺的一般者に於てあるものゝ自己限定作用と考へ、所謂志向作用といふ如きものはその抽象的象面と考へるのである。自覺的一般者に於てあるといふことが知るといふことである、その有が單に形式的有なる時、知的意識といふ如きものが考へられるのである。眞の意識は意志的意識でなければならぬ、內的志向の外に眞の志向はない。意識の本質は所謂志向にあるのではなくして、却つて意志にあるのである、志向は弱き意志に過ぎない。意志を一種の作用と考へるから、志向性が意識の本質の如くに考へられるのである。

意志するを云ふことは、知つて働く、働くことを知る、知りつゝ働くことを考へられるから、單に對象の志向と云ふ如き純知的態度とは全くその類を異にする様に考へられる。併し働くことは知ることではない。私が働くを云つても、その私は知られた

私であつて、知る私ではない、知る私は働く私を、即ち私の變化を見て居る私でなければならぬ。志向といふことから考へれば、知る私に於ては、志向せられるものが志向するものであり、志向するものが志向せられるものでなければならぬ。かゝる私が働くといふ如何なることを意味するか。働くといふことは、先づ變ずること云ふことでなければならぬ。かゝる私が知るといふ性質を維持しながら變ずること云ふには、志向するものに向ふ志向の方向、即ち内に向ふ方向が志向するものに違ぜない、志向するものゝ内容が志向せられる内容より大きいと考へられなければならない、兩者の間に間隙がなければならぬ。併し此の二方向が離れてしまへば、私といふものはない、従つて私が働くといふ如きこともない。働く私といふものが考へられるには、變化の一步一步が志向せられるものと志向するものと合一する知るものであつて、而もそれが變じて行くものでなければならぬ。かゝる知る私の連續が働く私と考へられるのである。斯くして働く私は知る私を含むこと云ふことができる。働く私即ち意志するものを、一つの線に譬へて見るならば、その一々の點が知るものであつて、その線の曲率が働く私の内容を考へ得るであらう。具體的立場から云へば、志向せられるものが志向するものとして、知るものといふものが考へられる時、それは既に線の一點として考へられるのである、知る私は既に意志する私であるのである。單に知る私と云ふものは、曲率零の直線の如きものと云ひ得るであらう。斯く考へれば、志向といふことは單に曲線に於ける點の方向とも考へ得るであらう。

又志向作用といふことから斯くも考へ得るであらう。志向作用の基礎には、實在的なものがなければならぬ、即ちノエシス的なものがなければならぬ、ノエシスの根柢には知る私がなければならぬ。知る私の根柢には、右に云つた如き働く私がないければならぬ。

すべて具體的一般者は自己自身の中に自己の内容を限定する限定面を有ち、判斷的一般者に於て抽象的一般者がそれに當る如く、自覺的一般者に於てそれに當るものは、知的意識面でなければならぬ。自覺的なものは知的意識面に於て自己自身を

限定すると考へることができ。此故に意識は志向的と考へられる。恰も判斷的一般者に於てあるものは、何等かの意味に於て述語を有つと一般である。併し抽象的一般者に於てあるものは、單に包攝的關係から成り立ち、自己自身を限定するものでない、自己自身を媒介せないと考へられる如く、知的意識面に於てあるものは、眞に自覺的一般者に於てあるものとして、自己自身を自覺的に限定し、自己自身を媒介するものではない。自己自身を自覺的に限定し媒介する作用は、志向的作用ではなくして、意志作用でなければならぬ。自覺的に自己自身の内容を限定する過程が我々に意志と考へられるものである。知的自覺もその實、此の如き意味に於て自覺と考へられるのである。志向作用の裡面には知的自覺即ち形式的意志がなければならぬ。斯く考へるならば、自覺的一般者の眞の自己限定作用として判斷に當るものは、意志作用であり、自覺的一般者の場所に於てあるものとして、主語となつて述語とならない個物に當るものは、意志するもの、意志的自己でなければならぬ。抽象的一般者の立場からは、判斷の基礎が主語となつて述語とならない個物にあると考へられるが、判斷を一般者の自己限定と考へれば、個物が判斷的一般の超越者述語面に於てあり、自己自身を判斷的に限定するものとして、判斷の基礎となると考へら

れねばならぬ如く、志向作用の立場から見れば、意志するものは超越的とも考へられるが、意識作用が自覺的一般者の自己限定と考へるならば、知的自覺の根柢に意志的自覺がなければならぬ。自覺的なものを基礎づけるものは、意志的なものである。判断とは自覺なき志向作用であり、志向作用とは自覺の内容なき意志作用である。斯く考へるならば、向に抽象的一般者が個物の述語面的統一と考へられると云つた如く、知的意識面と考へられたものは意志的に自覺するものの媒介面たる性質を帯びて來る。我々の意志的自覺の深まるにつれて、かゝる傾向が著しくなつて來るのである。

自覺的一般者に於ける自己限定面が意志するものゝ媒介面といふ性質を有つ時、此面に對應してその底に一つの共同的意志といふものが考へられ、所謂社會的意識といふものが成立する。之と共に、自覺的一般者の抽象面は判断的一般者の超越的述語面たる性質を有すると云ふが故に、判断的一般者の超越的述語面と合一する知的意識面の對象界として自然界と考へられたものは、合目的々世界と考へられる様になる。合目的々世界とは、意志的なものゝ自己限定面と考へられた超越的述語面に於て限定せられるものである。此故に合目的々世界は自然界の如く嚴密なる

意味に於て判斷的一般者によつて限定せられるものではない。

三

私は意識の志向作用に基いて、ノエマとノエシスの方向に超越することによつて、自覺的一般者を包む一般者に於てある睿智的世界といふものを考へることができると云つた。自覺的一般者に於てある我々の意識界とは、尙判斷の述語的方向への超越によつて考へられたものである。我々は之を基として更にこれ以上のものを考へるのである。意識が意識を超越するとは如何なることを意味するか。

具體者一般的が更に具體的な一般者に於て包まれる時、前の一般者に於てある最後のものは、自己自身に矛盾的なるものと考へられる。判斷的一般者の超越的述語面に於てあるものは、述語が直に主語となるものでなければならぬ、即ち自己自身に矛盾的なるものである、我々はかゝるものを働きて考へるのである。一般者の自己限定が深くなるに従つて、一般者自身は限定すべからざるものとなり、限定作用は「於てあるもの」に移り、「於てあるもの」が自己自身を限定するものとなる、その極その限定は自己自身に矛盾するものとなる。唯、かゝる一般者を越えて之を内に包む一

般者に於て、その内容が積極的に限定せられる、かゝる矛盾を内に包むものが考へられる、即ち自覺的一般者に於て私といふものが限定せられるのである、私とは自己自身の中に矛盾を包むものである。之と同じく自己自身を知るものを限定する自覺的一般に於てあるものは、知ることが知られることであり、知られるものが知るものであると云ふ意味に於て、自己自身に矛盾するものでなければならぬ、自己其者の存在が矛盾でなければならぬ。かゝる意味に於てあるものゝ最後のものが意志である。眞の自覺は單なる知的自覺にあるのではなく、意志的自覺にあるのである。働く自己にして始めて内容を有する自己と云ふことができ、意志することは眞に自己自身を知ることである。意志は自覺の極致といふことができる、自覺的一般者に於てある最後のものと云ふことができる。多くの厭世論者の考へる如く意志は矛盾の極致である、我々は欲することを滅する爲に欲するのである、死する爲に生きるのである。それで意識的自己が自己を超越して叡智的存在の世界に入るには、自己が自己の意志を超越せなければならぬ。我々の意志の奥底に於て意志的矛盾を超越して之に内に包むものが、叡智的世界に於てあるものである。我々はノエシスの方向に超越することによつて、ノエマの方向に超越するのである。超越的對象を意

識するといふことは、自己が超越的世界に入ること、に於て可能となると云はねばならぬ。

我々が自己の意志を超越するとは如何なることを意味するか。自己が自己の意志を越えるとは、單に意志がなくなると云ふことではない、單に無意識となると云ふことではない、意志は或目的の自覺より起りその目的を達することによつて消滅する。一方から見れば、意志は此の如き合目的々作用である。併し合目的々作用といふものが成立するには、その終に現れるものが始に與へられたものでなければならぬ。合目的作用とはその前後を包むものが、自己自身の内容を限定する過程と見ることができる。斯く自己自身の内容を限定するものが我々の自己と考へられるものであつた時、かゝる限定作用が意志作用と考へられるのである。かゝる意味に於て我々の意志の奥底に考へられる眞の自己とは、我々の意志を超越して之を内に包むものである、我々の意志はかゝる自己によつて基礎づけられて居るのである。判斷的一般者が自覺的一般者に包まれ、一般者自身が判斷的に限定すべからざるものとなる時、その最後の場所に於てあるものは働くものとなる。働くものは、有るものとして、は矛盾である、働くものは判斷的一般者に於てあるものではない、所謂自然界に

は眞の意味に於て働くものはない。唯、判斷的一般者が自覺的一般者に於てあり、之によつて限定せられるものとして、働きの背後に働くものが考へられ、働きは之によつて基礎づけられると云ふことができる。眞に働くものは意識的なものでなければならぬ。判斷的一般者の限定の過程に於て、主語と述語とが對立し、それが自覺的一般者に於て裏附けられる時働くものと働かられるものとが對立するが、自覺的一般者に於ては、斯る對立は知るものと知られるもの、即ち所謂主觀客觀の對立となる。而して前に單なる作用と考へられたものは、自覺的なものによつて裏附けられることによつて合目的々となり、更に自覺的なもの、其者の作用としては意志作用となる。自覺的一般者が更に之を包むものによつて裏附けられることによつて、之に於てある最後のものが自己自身の中に矛盾を含む意志作用となるのである。是故に眞に意志するものはや自覺的一般者に於てあるものではない、所謂意識を超越したものでなければならぬ。それは自己自身の中に主觀客觀の對立を含むもの、自己自身を見るものでなければならぬ。判斷的一般者に於てあるものが判斷的に自己自身を限定し、自覺的一般者に於てあるものが意識的に自己自身を限定する如く、それは知的直觀的に自己自身を限定するものでなければならぬ(若し知

るといふことは構成することであり、主客の對立を構成的形式と所與的質料との對立に考へるならば、それは創造的作用と云ふことができるであらう。斯くして意志は弱き直觀である、我々の意識に映されたる直觀の影と考へることができる。唯、我々の自己が自己の意志を超越するといふ時、それはもはや意識せられるものではない、反省の極限をも越えたものでなければならぬ。此故に普通には、斯る意味に於てあるもの、即ち敘智的自己といふべきものは考へられない、唯、自己自身を見るものゝ見られた内容だけが考へられるのである。云はゞそのノエシスの方面は見られなくなりそのノエマの方面のみが見られるのである。何となれば、一つの一般者が之を包む一般者に於てある時、包まれた一般者の場所が、包む一般者に於てあるものゝ内容を限定する抽象的限定面の意味を有するが故である。私は斯る意味に於て自己自身を見るものゝノエマとも云ふべきものをイデヤと考へるのである。斯くして意識的自己の立場にのみ留まる人は、自己を越えたものとしてはイデヤといふ如きものを考へるの外はない。併しイデヤは單に客觀的であつて、之より主觀的意識は出て來ない、否、イデヤが主觀的意識と關係することすら説明し得ないのである。

超越的自己を以上の如く考へるならば、我々が何物かを考へるといふ時、既に超越的自己の立場に立つて居るのである。判斷的一般者の自己限定として、自然界といふ如きものを考へるといふ場合に於ても、既にその判斷的一般者は自覺的一般者を包む一般者の中に含まれて居なければならぬ、斯くして始めてその判斷が眞とか偽とか云ひ得るのである。自覺的一般者に於てある自己といへども、尙規範的自己ではない、眞に思惟するものとは云はれない。それは却つて思惟せられたもの、對象化せられた自己といふことができる。是故に叡智的世界といふのは我々を越えた彼方にあるのではなく、我々は直に此世界に於てあるのである。自然界は云ふに及ばず、所謂意識界といへども、考へられたものであり、斯る意味に於ては却つて超越的と云ふことができる、一種の認識對象に過ぎない。判斷的一般者に於て限定せられるものが主語的なるものであり、その述語面の底に超越すると考へられるものも、尙否定的に肯定せられたものとして、反省的に思惟せられたものと云ふことができる。斯る意味に於て自覺的一般者は尙限定せられたものと云ふことができる。之を越えたものは、もはや如何なる意味に於ても、判斷的に限定することのできるものではない。唯自覺的一般者の場所を限定面として、その影を映すことによつて、尙判斷的

に限定することができ、限定することのできない一般者の自己限定といふ如きことを云ひ得るのである。故に眞の自己は自己自身の影を映すことによつて自己自身を限定する、意識的には我々はいつも自己の影を見て居るのである。我々の内部知覺の範圍といふのは、自覺的一般者に於て限定せられた個人的自覺の内容に當るのである。判斷的一般者に於て主語となつて述語とならないもの、換言すれば主語的なるものゝ中に述語的なるものを含むものが個物と考へられる如く、自覺的一般者に於て自己自身を直に志向するもの、云はゞノエシスの中にノエマを含むものが個人的自覺である。かゝる自覺に屬するものが内部知覺に屬するものと考へられるのである。推論式的一般者に準して云へば、それは恰も小語面に當るものとも考へ得るであらう。之に對して大語面的なる自覺の内容として社會的意識といふ如きものが考へられるであらう、而してそれは既に内部知覺の範圍を越えたものである。

四

自覺的なるものが自己自身を越えるといふのは、意志の底に超越するのである、ノエシスの方向に深まつて行くのである。ノエシスの方向に深まつて行くとは、ノエ

シスがノエマを含み行くことである、意識的有の意味が深められて行くことである。知的自覺に於てはノエシスはノエマを含まない、自己が尙自己自身の内容を意識せない。ノエシスが即ちノエマとして、自己が自己自身の内を意識するのが、感情的自覺である、感情的内容と考へられるものが、我々の自己の状態を現すものと考へることが出来る。判斷的一般者に於ける物の如く、感情我が最も適當なる意義に於て自覺的一般者に於てあるものと云ふことが出来る。意志我は働くものゝ如く、之を包むものによつて裏附けられた自覺的一般者の底に於て見られるものである。故に意志するものは既に意識を越えてあるものである、ノエシスがノエマを含むと云ふことが出来る。之を越えれば、もはや意識的に有といふべきものでない。意識的に有と考へられるものは單に表現するものに過ぎない、表現によつて意識せられるものは、意志的自己を越えてあるものゝ内容である。

ノエマとノエシスとの關係に於て既に判斷の主語と述語との位置が轉換せられる、述語的なものが實在的となるのである。ノエシスがノエマを含み行くといふ方向を進むことによつて、意志をも越えた時、超越的對象と考へられたものも自己自身を見るものゝ内容となる、有るものは自己自身を見るものである、主觀の中に客觀

が没入せられるのである。之に反し、何處までも主語的論理の立場に立ち、對象に基礎を置いて考へるならば、種々なるノエシスの變化も對象の變化と考へられ、自己が自己を超越すると云ふことは、主觀を客觀の中に没入することゝ考へるの外はない、そこに主客合一の知的直觀といふ如きものが考へられのである。かゝる場合、自己を意識的有に限り、それは單に眞理を對象とする認識主觀といふ如きものとなり、何等の有の意味も有せないものとなるであらう。客觀的なものの中に主觀性を含ましめれば、それは意識的自己から見て無限の創造作用とも考へられるであらう。私は之に反し意識的自己を自覺的一般者に於て限定せられた有るものと考へ、超越的對象の志向といふことから、逆に超越的自己といふものを考へるのである。無論、かゝる考方は論理の見方であつて、自己の體驗其者に於ては、唯、自己が自己自身の底を見ることである、逆に論理的思惟は一種の自覺である、而もその最も抽象的なものと云つてよい。併し哲學は何處までも論理的立場の上に立たねばならない。苟も超越的自己といふ如きものが考へられる以上、その考へられる所以が論理的知識の構造の上から明にせられねばならぬ。而してかゝる自己の構成として考へられる知識内容が、それによつて限定せられなければならない。かゝる目的を以て、私は

自覺的一般者に於て限定せられた意識的自己を越えたものを包むものとして、更に自覺的一般者を包む一般者といふものを考へるのである。而してそれは自己自身を見るものを限定する一般者として、知的直觀の一般者と名づけることができるであらう。無論、知的直觀と云へば、歷史上、主客合一の意味を有し、尙對象の見方の舊套を脱せないのであるが、私は之によつて唯、自己が直に自己自身を見ると云ふことを意味するに外ならない。判斷的一般者に於ては判斷がその限定作用となり、自覺的一般者に於て自覺がその限定作用となり、知的直觀の一般者に於ては自己自身を見ると云ふことがその限定作用となるのである。

右の如くにして、自己自身を見るものを包む知的直觀の一般者に於て限定せられる最初の有と考ふべきものは、カントの所謂意識一般とか、純粹我とかいふべきものである。それは自己意識の底に自己を超越して自己の意識的作爲をも見るものである、ノエシスの方向に意識を超越したものである。此故にそれは意識的有とは考へられない。併しノエシスの方向に超越したものととして、何處までも自覺的有の意義を有し、意識とか、自己とかいふ意義を有するものとして、ノエマ的に考へられた超

越的對象とは相反する方向に立つものでなければならぬ、すべての客觀的存在は之によつて基礎づけられるのである。それでは、かゝる意識一般といふ如きものは、知識直觀の一般者に於て如何なる意味に於ての有であり、之に於て有るものとして如何なる位置を取るであらうか。嘗て判斷的一般者の述語面の底に超越して、自覺的一般者に於てあると考へられる最初の意識的自己が知的自己であると云つた。

之と同じく、自覺的一般者に於てある最後のもの、即ち意識的意志をも超越して、自覺的一般者を包む一般者に於てある最初の超越的自己と考へられるものは、知的睿智的自己でなければならぬ。すべて具體的一般者は自己の中に自己の影を映す抽象的限定面を有ち、包まれた一般者がその役目を演ずると云つたが、かゝる意味に於て判斷一般的者が自覺的一般者に於て包まれ、單にその抽象的限定面たる意義を有つた時、それが知的自覺の意識面と考へられる如く、自覺的一般者が知的直觀の一般者に包まれ、後者の抽象的限定面となつた時、それは睿智的自己の知的意識面と考へられるのである。知的自覺といふのが未だ自己其者の内容を有たない、單に形式的自覺である如く、單にノエシスの方向に超越することによつて考へられた意識一般とかいふ如きものも、睿智的自己としては、單に形式的たるを免れない。自覺的一般

者の内容そのものが知的直觀の一般者に於てあるものとして、その存在形式を變ずるに過ぎないのである。

睿智的自己の自覺によつて、それ以前の一般者の内容が如何なる意味に於て變せられるであらうか。我々の自己が尙意識的にも自覺せない間は、自己は單に判斷的一般者の超越的述語面といふ如きものであつて、我々は單に判斷的に限定せられる客觀界を見て居るのである、それは廣義に於ての自然界とも考ふべきものであらう。我々の自己が意識的に自覺した時、自覺的一般者に限定せられた所謂意識界を見る。是に於て、二つの世界が對立する。何となれば、意識面は又直に判斷的一般者の述語面的性質を有し、判斷的一般者に於て限定せられるものが、意識面に映された意識的自己の内容と考へることができ、又その逆に意識面に於てあるものは判斷的に限定せらるべきものと考へることもできる。然るに自覺的一般者に於て限定せられた意識的有は單に意識的自己によつて限定せられた有たるに過ぎない。單に自己意識の内容、即ち所謂内部知覺に屬するものは、直にそれが判斷的に自己自身を限定すると云ひ得るであらう。これだけの範圍に於ては、判斷的述語面に於てあるものが完全に自覺的なるものに包まれ、又判斷的一般者が自己自身の中に對象を有つと云

ふことができるであらう。併し上に論じた如く、ノエシスの方向は單に自己意識に止まるものではない、意志の底をも越えるものである。かゝる意味に於て、意識を越えてあるものゝ内容を映すものとして、意識の超越的志向といふことが考へられるのである。かゝる立場から見れば、最初に判斷的一般者に於て限定せられると云つた判斷的知識内容といふものは、判斷的一般者が自覺的一般者に於てあるといふ意味に於て、すべて意識せられるといふ意味を有すると共に、それは單に自覺的一般者に於てあるものゝ内容として、限定せられるだけのものではなく、更に深いノエシスによつて志向せられるものとして知的直觀の一般者の内容として限定せらるべき意義を有たなければならぬ、判斷的知識の根據は實に此にあるのである。意識せられたものは、それは意識せられたものであると同時に、いつも超意識的意義を有つて居なければならぬ。自覺的一般者に於ては、何處までもノエシスの方向とノエマの方向とは對立を成して居るのである。之に於てある最後のものと云ふべき意志に於ても、積極的に結合することはできない。意志はそれ自身が矛盾であつて無限に動くものである。自覺的一般者が知的直觀の一般者に於てあり、之によつて裏付けられる限り、我々の意識に於てあるものは睿智的世界を映すものとして、すべて

が當爲的である。無論單に自覺的一般者が之を包む一般者に於てあると云ふ意味に於ては、意識に於てあるものが直に當爲的であるとは云ひ得ないであらう。意識に於てあるものが單に超意識的なるものゝ内容を映すと云ふだけの意味に於ては、單なる意味の世界といふものが考へられるであらう、我々の意識作用は單なる意味を志向すると考へられる。併しノエシスの根柢が深く知的直觀の一般者に於てあり、之に於て限定せられるものとするならば、自己自身を見るものゝ内容を映すものとして、意識作用は當爲的でなければならぬ、價值實現の作用でなければならぬ。

それで、我々の意識的自己に對して客觀界と考へられるものは、意識的自己を越えてその底にあるもの、即ち叡智的自己の内容に過ぎない。無論、意識的自己其者の内容も一層深き自己の内容の限定せられたものに過ぎないが、意識的自己によつて限定せられない部分が、之に對して客觀界と考へられるのである。有るものといふ意味は意識的自己の方に屬し、之に對立するものは非實在的なる、意味の世界とか、更に進んで眞理の世界とか考へられるのである。而して判斷的一般者に於て限定せられるものゝ中、自己意識に屬する以外のもは此世界に屬するのである。以上述べた如く、判斷的一般者が知的直觀の一般者に於て包まれた時、その内容はすべて有の意

味を失つて、意味とか價值とかいふものとなる。自覺的一般者も知的直觀の一般者に包まれるに至つては、意識的自己も對象界に入らねばならない。カントの意識一般といふのは、此の如き意味に於て睿智的自己でなければならぬ。故に此立場からは、すべてが認識對象として價值の世界に入るのである。

判斷的一般者が自覺の一般に包まれることによつて、知的自覺といふものが考へられ、更に自覺的一般者が知的直觀の一般者に包まれることによつて、意識的自己が自己自身を越えて睿智的自己となる。それがカントの意識一般と考へられるものである。意識一般はかゝる意味に於て既に我々の意識を超越したものである、如何なる意味に於て意識の有とは考へられないものである。併し我々の意識的自己がノエシスの方向に超越すると云ふことは、一方からは、我々の意識内容をすべて自己自身を見るものゝ内容と爲すことである、自己を没することによつて、自己が客觀界を包むことである。かゝる超越的自己の立場を、意識的自己の立場から見れば、我々の客觀的對象界を構成する認識主觀と考へられねばならない。判斷的一般者の述語面が超越的となり、自己自身はもはや判斷的に限定すべからざるものとして、何處までも限定するものとなる時、即ち自己自身に還り、直に自己自身を限定するものとな

つた時、それは構成的と考へられねばならぬ。而して判斷的一般者の述語面が自覺的一般者に於てあるものとして、その限定が自覺的限定と考へられ、更に知的直觀の一般者に於てあると考へらるれば、それが認識對象界を構成する範疇的限定の意味を有たねばならぬ。範疇的限定とは主語が述語の中に没入し、述語面が主語的有を限定することを意味するのである。範疇其者の本來の意味たる最後の述語的なものが、構成的範疇として認識對象を構成する意味を有つには、判斷的一般者が一度自覺的一般者に於てあると考へられ、而してそれがノエシス方向へ超越することによつて、知的直觀の一般者に於てあると考へられるのである。すべての私の表象に私が考へるといふことが伴ふと云ふことが先驗的演繹の基礎となる所以である。認識主觀とは判斷的一般者を包む自覺的一體者をノエシス方向へ超越したものであつて、判斷的一般者が自覺的一般者に於てあることによつて、知識が内容を有つのである。而して内容のない知識は客觀的と云はれない、睿智の世界自己の内容として真理とはならないのである。認識主觀は元來、知的自覺の超越として、判斷の述語面的性質を有するが故に、自覺的一般者の構造は之に對して所與的原理と考へられるに過ぎない。カント哲學に於ては、自覺として單に知的自覺のみが考へられた

が故に、所與的原理としては單に形式的なる自覺の外に考へられない、「時」の形式といふ如きものが所與的範疇と考へられる所以である。我々の自覺は時の形式に於て現れる。嘗て論じた如く、推論式的一般者はその小語面に於て自覺に接觸し、小語面的自覺が現在として、時の形式が構成せられ、之によつて經驗内容が與へられるのである。單に自己の中に自己を映すといふ如き形式的なるノエシスが、時の形式を構成し、かゝ形式的なるノエシスによつて、意識せられたノエマが經驗内容となるのである。判斷的一般者で推論式一般者にまで廣げられた時、それは既に自覺一般者に於てあることを意味するものであつて、判斷的一般者の立場から云へば、その限定が「於てあるもの」に移り、「於てあるもの」が自己自身を限定するものとして、その限定的形式が時の形式となる。「時」は特殊なるものが自己自身を一般的に限定する形式と云ひ得ると共に、逆に限定すべからざる一般者が自己自身を限定する媒介作用と考へることもできる。之を自覺的一般者の立場から云へば、形式的なるノエシスが自己の中に自己を意識することである。カントが直覺の純粹形式と考へた「時」とは此の如き自覺の形式を意味するものと思ふのであるが、上に云つた如く、知的自覺といふのは、自己が未だ自己自身の内容を有せない形式的自覺であつて、かゝる自覺を所

與原理としては、單に自然界といふ如きものが考へられるに過ぎない。之に反し、判斷的一般者が自覺的一般者に於てあるといふ意味を深めて、自己自身の内容を意識する意志的自覺に於てあると考へるならば、睿智的自己の立場に於て、合目的々世界を見ることができる。意志的自覺を超越することによつて睿智的自己に入るが故に、知的直觀の一般者に於ける形式的有、即ち單なる知的自己としてカントの意識一般の意義を有しながら、而も合目的々世界を認識對象界と考へることができるのである。意志的ノエシスが所與原理として、意志的ノエシスのノエマが小語面的自覺の内容となる。

カント哲學の立場は、大體右の如く考へ得ると思ふが、現象學の立場は如何に考ふべきであらうか。すべて對象認識の立場を除去して純なる現象學的立場に立つと云ふことは、やはりノエシスの方に意志的自覺を越えて自己自身を見る知的睿智的自己の立場に立つことでなければならぬ、即ち何處までもノエシスの立場を深めたものである。かゝる立場から本質が直觀せられるのである。本質とはやはり睿智的自己が自己自身の内容を見る知的直觀のノエマに屬するのである。かういふ意味に於てはカントの意識一般の立場とその性質を同じうすると云ふことがで

きる、唯カントに於て、所與の原理となつた自覺の立場を、睿智的自己の立場にまで深めたものである。カント哲學に於ては、判斷的一般者の超越的主觀として、睿智的自己の構成的立場が主となり、自覺的一般者の超越的主觀としての所與的立場が深く考へられて居ない。之に反し、現象學では所與の立場、即ち直觀的立場のみが考へられ、睿智的自己が超越的ノエシスとして、意識的自己に對し、認識對象を構成する構成的意義を有することが忘れられて居る。超越的對象が我々の意識に於て志向せられると云ふには、ノエシスは我々の意識我の底に超越せなければならぬ、意識我の立場を何處まで深めても超越的對象を志向することはできない。而して此の如きノエシスの底に超越することによつて對象界を見る自己の立場が、意識的自己に對して構成的主觀と考へられるものである、ノエシスの方向へ超越するといふことは作用する自己の奥底に超越することである、作用としての自己の奥底へ超越することである。斯く意識的有としての作用の意義を脱せないかぎり、現象學の立場に立つことはできない。ノエマとノエシスとの對立を見る純我の立場は、ノエシスのノエシスの立場でなければならぬ、それは作用の作用として構成的意義を有せねばならない。志向を意識の本質となすブレンターノより出立したフッサールの現象學

は、尙その立場を離れて居ない、純我といふも表象的立場を何處までも廣めたものかと思はれる。かゝる立場からは、意志の對象の如きは云ふまでもなく、恐らく思惟の對象も意識せられないであらう。無論、作用の綜合統一によつて志向せられると云ふも、作用と作用と結合すると云ふことは高次的なる意識内容を構成することであつて、かゝる構成作用が眞に意識することである、意識に於ては作用することが見ることである。我々は思惟する時、意識するのである。「思惟せられたもの」と云へば、それは志向の對象とも考へ得るであらう。併しその時は表象的意識の立場に返つて見て居るのである。表象作用をいくら重ねても異なつた作用は出て來ない。之に異なつた作用を加へるとすれば、その作用も亦意識作用でなければならぬかぎり、異なつた意味の意識が成立せねばならない。元來、表象作用を基礎としてその上に種々の作用が加へられて行くのではなく、意識其者の意味が變せられて行くのである、單に表象的意識が深められるのではない。意識の志向といふことは低次的意識作用が高次的意識作用の内容を映すことである。すべての意識作用は自己といふものに結合せねばならない、ノエシスが實在的と云ふのは、自己に結合して居るといふことでなければならぬ。自己とは自己の中に自己を志向するものである、即ち自

覺するものである。自己其者の具體的立場から云へば志向することは自己の中に自己の内容を構成することである。自覺なくして意識作用といふもの考へられなうとすれば、かゝる構成作用こそ意識の本質と云ふべきである。志向作用といふのは、かゝる構成的方面を去つた抽象的一面に過ぎない、意識せられた自己の立場に過ぎない。かゝる立場からしては、ノエシスは意識せられない筈である。現象學者は意識的自己の立場と睿智的自己の立場とを混同して居るかと思ふ。

五

私はカントの意識一般の立場と今日の現象學の立場とを自己自身を見る睿智的自己の兩面と考へた。我々が意志の底に超越して睿智的自己の立場に立つた時、それが所謂意識我を超越した自己の立場として、意識我に對して對象界を構成する認識主觀と考へられると共に、すべての立場を除去して自己自身の内を見る直觀的自己とも考へられねばならない。唯それは所謂意識せられた意識であつてはならぬ、意識を意識する意識でなければならぬ。従つてそれは單に志向を本質とするものではなく、志向するといふことは自己が自己自身を限定することであり、一方に作

用の意味を有つて居なければならぬ、單に志向するものでなく自覺するものでなければならぬ。見るものは單に記載するものでなく、自己自身の中に對象を有し、自己自身の中に自己を限定して行くものでなければならぬ。自己自身を直に對象とすることによつて種々の作用の意味が限定せられるのである。

睿智的自己といふのが右の如きものとするならば、それは判斷的一般者に於て對象的有として限定することのできないのは云ふまでもなく、自覺的一般者に於ても意識的有として限定し得ないものでなければならぬ、即ち何處までも知識的に有として限定することのできないものであつて、却つて知識を限定するものと云はねばならぬ。而も我々が意識の超越的志向によつて知的直觀の一般者の限定といふものを考へ得るならば、かゝる一般者に於て限定せられた有と云ふことができる。自覺的一般者に於て意識として意識せられるものは、かゝる超越的自己の抽象的一面に過ぎない。その根柢には、超越的自己が自己自身を見ることによつて、自己の中に自己の影を映して居るのである。唯、上に云つた如く、それは睿智的世界に於ける形式的有、即ち知的自己として、未だ睿智的自己自身の内容を有せざるが故に、睿智的自己としても眞の有と考へることはできない。自覺的一般者の内容を唯形式的にそ

の意味を變するまでである。是故に、かゝる睿智的自己は超越的と云つても、單に認識主觀と考へられ、その内容は有の意味を失つて價值と考へられるのである。かゝる睿智的自己によつて我々の意識面が裏附けられた時、意識面に於てあるものは當爲的となり、そのノエシスの方面に於ては形式的自己の外に見られないが、そのノエマ的方向に於ては超越的對象即ち、價值を見るのである。かゝる立場に止まるのがカントの認識論である。始から知るものと知られるものとを對立せしめ、認識を作用となす考から出立すれば、これ以上に進むことは不可能であらう。併し屢云つた如く、超越的志向を基として知的直觀の一般者の限定といふことが考へ得るならば、之によつてそれ以上の「有るもの」を考へることができらるであらう。少くも從來の考へ方よりも形而上學的なるものと概念的智識との關係を明にし得ると思ふ。

我々の自己といふのが單に意識作用の統一點の如くに考へられ、意識するといふことが作用することであると考へられるならば、之を超越するといふことは單に對象的方向に超越すると云ふの外ないであらう。併し意識的自己といふのが、判斷的一般者を包む自覺的一般者に於て主語的方向に限定せられた有とするならば、自覺的一般者を包む一般者に於いてノエシスの方向に限定せられた有として、超越的自

己といふを考へることができらう。判斷的一般者が自覺的一般者によつて包まれた時、その述語面が自覺的一般者に於て知的自覺の意識面となり、之に於てあるものがノエシスとしてノエマ的に對象を志向する如く、自覺的一般者が更に知的直觀の一般者によつて包まれた時、自覺の意識面は超越自己の意識面となり、之に於てあるものはノエマ的に超越的對象を志向すると考へられると共に、ノエシス的方向への超越をも考へられなければならぬ。而して知的ノエシスといふのは、意識的有としては全からざるものであつて、自覺的一般者に於て眞に有るものは意志的でなければならぬ、眞の自己は知的自覺にあるのではなくして意志的自覺にあるのである。意志は自己自身の内に志向し、その志向は同時に自己の中に自己の影を映すことである。かゝる見方よりすれば、知的志向の背後には意志があり、ノエマと見られるものは意志がその内容を映して居るのである。斯く考へ得るならば、超越的自己の意識面に於てある規範的意識、即ち睿智的ノエシスともいふべきものは、全からざる睿智的自己であつて、超越的對象と考へられるものは、睿智的自己の内容の影に過ぎない。睿智的ノエシスを單に認識主觀と考へれば、ノエマ的なものは全然有の意義を失つて價值となり、ノエシスをノエマに含めて考へれば、プラトンのイデ

ヤの如き形而上學的實在ともなる。形而上學的實在とはノエマの中へノエシスを含めたものである。意識現象に於ても、ノエシスをノエマに含めて考へれば表象心理學に於ての如く表象が意識的有と考へられるが如く、超趣的意識面に於ても同様の考へ方が成立するのである。現象學の立場は上に云つた如く意識一般の表象的方面を深めたものと考へ得るが故に、かゝる立場に於ては、プラトンのイデアはその實在性を失つて現象學的本質となるのである。

すべて一般者が自己自身を限定すると云ふには、その限定作用といふものがなければならぬ、之によつて種々の一般者が區別せられ、又その關係が考へられるのである。判斷的一般者に於ては、それは判斷其者であるが、自覺的一般者に於ては、それは所謂意識作用と考へられるものである、判斷に於ける主語と述語との關係は此に於てはノエシスとノエマとの關係となるのである。一般者が自己自身に還るに従つて、即ち場所が無となるに従つて、限定作用が「於てあるもの」に移り、「於てあるもの」が自己自身を限定するものとなる。判斷的一般者に於てあるものは、個物として述語的なるものを含み、述語的に互に相限定するものとなる、その極遂に働くものと考へられるに至る。自覺的一般者に於ては、ノエシスとノエマとが相對立し、自覺的一

般者が自己自身に還るに従つて(換言すれば自己自身を越えて更に大なる一般者に於てあると考へられるに従つて)、ノエマはノエシスに含まれて行く、知的自覺に於てはノエシスは單に形式的有と考へらるに過ぎないが、意志的自覺に至つては、ノエシスの中にノエマが含まれると考へることができる。上に云つた如く意識的自己の底に超越すると云ふのは、かゝる意味に於て意志的ノエシスの底に超越することである。意識的自己の根柢たる意志をも越えるといふことは不可能と考へられるかも知らぬが、我々は如何にして意志を意識し、意志を考へるのであるか。意志は自己が自己の中に志向し、志向するものが何等かの意味に於て志向せられるかぎり、意識せられるのである、ノエシスがノエマとなり、ノエマがノエシスとなるかぎり、意識せられるのである。無論ノエマ的なものに對しては、ノエシス的なものはいつても超越的である、知的自覺の立場に對しては、意志の内容も外的であり、超越的であると云ふことができる。唯、知的自覺と意志的自覺とは異なるものではなく、知的自覺は意志自覺の形式的限定として、意志的内容が知的自覺の形式に於て限定せられ、ノエマ的に映されるかぎり、意志的自己が意識せられるのである。併しノエシスの方向にあるものが、もはやノエマ的に自己の内容を映すと云ひ得ない時、即ちノエマ的

なるものが意識的ノエシスを越えた時、我々の自己が意志の底に超越したと云ふのである。行爲的自己が先づかゝる自己と考へることが出来る、我々の意識的自己の根柢にはかゝる意味に於て行爲的自己があるのである。我々の意識的自己は、却つてかゝる自己の立場に於て限定せられたものである。かゝる自己の内容は意識的自己に對して外的とか超越的とか考へられるが、單に爾考ふべきものでなく、却つて一層深い自己の内容に過ぎない、自己がノエシスの方向に超越することによつて見られるノエマである、超越的志向の根柢も此にあるのである。

意志の内容も元來知的ノエマなるものではない、併し意志的自己は自覺的一般者に於てある最後のものとして、尙自覺的に限定せられる意義を有し、意識面に自己自身を映すを考へられるものである、ノエシスとノエマとの結合性を失はないもの、即ち未だ所謂内部知覺の統一を脱せないものを云ふのである。個物の内容も抽象的一般者に入れることはできない、併し個物は主語となつて述語とならないものとして判斷的一般者に於て限定せられ、更に判斷的一般者に於てあるものとして働きといふものが考へられると一般である。判斷的一般者の述語面の底に超越して自覺的自己といふものが考へられた時、そればもはや判斷的一般者に於ては最後の有としても限定することはできない。併しそのノエマは判斷的一般者の内容として考へられる如く、意志的自己を超越して行爲的自己となつた時、自覺的一般者に於て最後の自己としても限定できないが、そのノエマは尙自覺的一般者の内容として考へることができるのである。

私が行爲するといふことは、自己の意識を越えた外界を自己の中に取り入れるこ

ごである、外界の出来事を自己の意志實現として自己の内容を表現するものと爲すのである。かゝる場合、客觀的實在が自己の意識的有となるのでない、客觀的實在は何處までも客觀的實在である。然らばと云つて、主觀的自己が自己を失つて、客觀的實在となるのでもない、行爲することによつて我々は却つて深く自己を意識するのである。かゝる自己は自己自身の意識を超越することによつて、外界を包むのである。自己を客觀化することによつて、自己を深くするのである。唯、意志の表現が知的對象としての外界の出来事と見られ、又意志の内容が知的に意識せられたものと見られるから、意志は單にかゝる兩面の統一として知的自覺に包まれる如く考へられるのであるが、外界の出来事といふものが考へられるには、知覺的意識といふものが基礎とならねばならぬ、知覺的ノエシスの志向が基礎となつて外界といふものが考へられるのである。併しかゝるノエシスの志向を基礎としては、それが意志的動作であるといふことは考へられない、斯く考へるにはノエシスの志向の意味が最初から變せられねばならぬ。又知覺と結合した衝動的意志といつても、それは既にノエシスの方向への超越的意義を含むものとして、知的自覺の限定を越えたものでなければならぬ。此の如きノエシスの超越の意味を何處までも深めて行けば、知的

自覺のノエシスの超越と考へられる意識一般を越えて、叡智的世界に於て有るもの、即ち叡智的自己の内容といふものをも考へることができ、判斷的一般者を越えて自覺的一般者に入る時、私は私を知ると云ふことを以て、述語面的超越を證し得るとするならば、自覺的一般者を越えて更に之を包む一般者に入る時、私は私の行爲することを知ると云ふことを以てノエシスの超越を證し得ると思ふ。私は是に於て我々の身體と考へるものに就いて一言して置かうと思ふ。我々は普通に身體なくして心はなく、心は身體に宿ると考へる。併しさういふ場合、身體とは如何なるものであるか。我々の感覺的對象として知られるものは意識せられたもので、意識を宿すものではない。我々の意識の基礎となるものは、右に云つた如き行爲的自己でなければならぬ。我々の身體はかゝる行爲的自己の表現として、我々の意識の基礎となる意味を有するのである。意識的自己の立場に立てば、身體は我々の意志の機關とも考へられるであらう。併し身體は單なる道具ではない、身體は意識の底にある深い自己の表現である。かゝる意味に於て我々の身體は形而上學的意義を有つと云ふことができる。我々の眞の自己の内容には、必ず行爲を伴はねばならない、身心如の所に我々の眞の自己が現れるのである。

六

意識の志向作用を基礎として、之をノエシスの方向に超越すると考へるならば、それは知的一般者に於ける單なる形式的有として、意識一般といふ如きものが考へられるに過ぎないであらう(哲學は認識論に止まるの外はない)。併し我々は行爲的自己の自覺によつて、深く叡智的ノエシス其者の中に入り得るとするならば、之によつて、叡智的世界に於てあるものが、如何なる意味に於て有るものであり、又その内容が如何なる形に於て我々の意識に映されるかを論ずることができであらう。自覺的一般者に於ても、判斷的一般者の述語面を意識面となす知的自覺は自己自身の内容を意識するものではなく、自覺的一般者に於て眞に有るものではない。眞に自己自身を對象とし、自己自身を意識するものは、意志的自覺でなければならぬ。自愛といふのが意識的に自己の存在を限定するものである。ノエシスの方向に超越すると云ふこと、即ち深く自己自身の奥底に到ることによつて考へられる、知的直觀の一般者に於てあるものに於ても、眞に有るものは所謂意識一般といふ如きものではなく、行爲的自己の自覺でなければならぬ。行爲的自己とは客觀界を自己實現の手

段となすもの否、その表現となすものである（對象其者を愛することによつて自己自身を愛するものである）。かゝる立場から云へば、知的自覺が形式的なる意志的自覺と考へ得る如く、意識一般は形式的なる行爲的自己といふことができる。意志的自己は知的自己の意識面を超越して自己自身の影を之に映す如く、行爲的自己は物自體として意識一般の對象界を超越して居ると共に、いつもその影を意識一般の對象界に映して居る。行爲的自己の自覺によつて、認識對象界と睿智の世界とが結合するのである。かゝる意味に於て、先づ我々の行爲といふものが知的直觀の一般者に於て有るものを限定すると考へることが出来る。無論、私は行爲的自己の自覺によつて睿智の世界の知識が成立すると云ふのではない、斯く考へるのが形而上學である。唯如何にして形而上學的有といふものが考へられ、それが我々の認識對象界に如何なる意味を有つかを論ずるまでである。

我々は意志の奥底に超越して、知的直觀の一般者に於てあるものに到ると考へる時、それが行爲的自己と考へられ、行爲といふものの知的直觀の一般者の限定作用とも考へられるが、かゝる考へは前の一般者から後の一般者に移る境界線に屬するものであつて、未だ知的直觀の一般者其者の自己限定作用とは云はれない。行爲的自己の

立場に於て尙主客の對立がある、意識的立場から見た超越的ノエマと超越的ノエシスとが對立して居る、知的直觀の一般者に於てはかゝる意識的對立は消されねばならない、ノエマはノエシスの中に沒せられねばならぬ、客觀界は何處までも主觀化し盡されねばならぬ、所謂藝術的直觀の如きものに至つて、始めて知的直觀の一般者に於て眞に有るもの、即ち自己自身の内容を直觀するものを限定することができ。

此處に於ては働くことが見ることである、否、プロチノスの云ふ如く働くといふことは見るといふことの不完全なる形である。私が睿智の世界を限定する一般者を知的直觀の一般者と名づけた所以である。無論、知的直觀の一般者の深い奥底にあるものは、藝術的直觀を越えたものでなければならぬ。藝術的直觀に於ては、意識的ノエマは睿智的ノエシスの中に沒入すると云つても、尙睿智的ノエマは失はれるのではない、尙對象性が維持せられて居るのである、ノエシスは尙ノエマ的に縛せられて居るのである。ノエシスの超越の極致、即ち深き反省の極點に於ては、自覺的一般者に於て最後の有るものが意志と考へられる如く、知的直觀の一般者に於ても、之に於てある最後のものとして睿智的ノエマを越えてあるといふ意味に於てのみ考へられるものがなければならぬ、即ち單に自己自身を見るものと云ふ如きものがなけ

ればならぬ。かゝるものが廣義に於ける道德的自己(廣義に於ける良心)と考へられるものであらう。

それで、私は知的直觀を自覺的一般者を包む一般者の限定作用として、之によつてプラトンやプロチノスのそれに似たる一種の睿智的世界を考へたいと思ふ。併しそれらの有はノエシスの方向に超越したものであつて、ノエマの方向へ超越したものではない。知的直觀といふのは、自己がイデヤに合一することではない、又所謂主客合一といふことでもない、自己が直に自己を見ることである、自己が自己の奥底を見ることである。イデヤといふのは、かゝる自己自身を見るものゝ内容として、超越的ノエマの方向に見られるものに過ぎない。知的直觀の一般者に於てある最初の有、即ち形式的睿智的自己として意識一般といふ如きものが考へられるであらう。之を單に意識的自己を超越すると云ふだけの意味にて消極的に考へなければ、全く有の意義を失ひ、單なる規範意識として之に對するものは價值と考へられるであらう。併し右に云つた如き意味に於て、それが一種の睿智的自己と考へ得るならば、それは一種の行爲的自己として構成的と考へられ、更に自己自身を見るものとして真理のイデヤを見るものと考へることかできる。但し、それは知的直觀の一般者に於

て知的自覺の位置を占めるものとして、それ自身の内容を有するものでない、一面には尙自覺的一般者の場所の意義を有し、その内容を内容となすものである、自覺的一般者に包まれた一般者の内容を、形式的にその意義を變する迄である。故に睿智的自己其者の内容は眞理として認識する事はない、それは物自體の世界に屬するのである。睿智的自己其者の内容は、唯、藝術的直觀の如きものに至つて、始めて見られるのである。自覺的一般者に於て眞にあるものは、自己自身の中に志向するものでなければならぬ、ノエマがノエシスに返るものでなければならぬ。意志的自己はかゝる意味に於てその極點にあるものである、自覺的一般者に於ける最後のものである。併しノエシスとノエマとの兩方向の中和せるものとして、最も適當なる意味に於て自覺的一般者に於てあるものを考へることができるものは、感情的自己でなければならぬ。感情の内容は最も適當なる意味に於て意識的自己自身の内容と考ふべきものである。自己自身の中に志向すると云ふ立場に於て限定せられた靜的統一が感情的自己である。志向するといふことを自己の中に自己の影を映すことであり、ノエマとはノエシス自身の中に映されるノエシスの影であるとすれば、自己が自己自身の中に映す自己自身の影像が感情的自己であり、かゝる影像を自己と

して固定することが自愛である。自覺的一般者に於て、此の如く自己自身の内容を意識する具體的有が考へられる如く、知的直觀の一般者に於ても、睿智的ノエシスと睿智的ノエマとの中和せるものとして直に自己自身を見るものを考へることができる、それが即ち藝術的直觀の自己である、美のイデアを見るものである。故に藝術的直觀は意識的自己を忘れて、物其者を直に自己として之を愛し、之と合一する事によつて成り立つ、而してそれは我々の感情の内容として現れるのである。藝術的直觀に於ては、自己自身を見るものは、意識一般の抽象的立場を越えて、直に睿智的自己の内容を見るが故に、美の内容其者は知識の立場には入り來らない、美はイデア其者の相である、藝術的直觀に於てのみ我々はイデア其者を直觀すると云ふことができる、地上に於ける美しきものゝみ永遠なるものゝ姿である。更に之をノエシスの方向に越ゆれば、もはやイデアを見ると云ふことはできない、睿智的ノエシスは全然ノエマ的限定を越えて廣義に於ける所謂實踐理性の自己となる、恰も自覺的一般者に於て、之に於てある最後のものとして、意志はノエマ的に限定することのできない、ノエマが直にノエシスであるとして一般である。實踐理性的自己に於ては、ノエマ的なものはノエシスの中に没却し去られるのである。かゝる睿智的ノエシスは唯、意識

のノエシスの奥に良心として意識せられる、良心とは藝術的直觀をも越えて唯、我々の心の奥に直に自己自身を見るものである。行爲的自己の形に於ては、カント學派の云ふ如く當爲的主觀と考へることが出来る。勝義に於ける當爲的主觀は道德的自己であるが、意識一般も形式的とは云へ、當爲的主觀と云ふことが出来る。當爲的主觀に對しては、ノエマ的なるものは當爲とか價值とか云ふの外はない。意識一般は自己直觀の内容を有せざるが故に、道德的主觀はその内容の深きが故に共に、ノエマの方向には唯、當爲を見るのみである。善のイデアは見られるものではない、それは唯、無限の發展であり、進行である。見られるものとしては唯ノエシスの方向に所謂睿智の性格の如きものが考へられるまでゝある。併し睿智の性格とは美のイデアの知き意味に於て見られるものでなく、唯、單なる理想に過ぎない。

私は以上述べた如くにして睿智の世界を考へ、之に於て有るものゝ種々なる區別及び關係を論じようと云ふのである。睿智の世界が我々の認識對象となること云ふのではない、かういふ意味に於ては、私は何處までもカントの立場を守るものである。唯、私は知るといふ考を根柢的に變ずることによつて、カントの認識主觀の如きも一

種の睿智的自己として考へ得ると思ふのである。認識主觀の立場に立てば、睿智的世界は何處までも物自體の世界として不可知的であり、超越的である。カントは質料所與の原理として知覺的意識の如きものゝみを考へたから、認識對象の世界として單に自然界といふ如きものゝみが考へられたが、所與原理としての自覺的意識の意味を深めて行けば、自然界から合目的々世界に至り、更に自覺的意識其者を對象とする心理的世界に至り、遂に歴史的世界にまでも至ることもできるであらう。併しそれは何處までも認識對象界であつて、我々の眞の自己其者即ち睿智的自己のある世界ではない、我々の眞の自己は歴史の世界の中に生死するのではない。歴史の中に生死するものは所謂意識的自己であつて、睿智的自己の影像に過ぎない。我々の眞の自己は、意識一般の底に尙自覺の意味を深めることによつて考へられる睿智的世界に住んで居るのである。而してかゝる意味に於ては道德的世界がその最も深いものと考へることができらうであらう。

すべて一般者の自己限定が深くなるに従つて、その限定が「於てあるもの」に移り、於てあるもの「が自己自身を限定すると考へられると共に、一般者自身はもはや一般者として限定すべからざるものとなり、單に法則として、於てあるもの」に對立する。推

論式一般者に於て、小語面的なるものに對して、大語面的なるものがそれである。かゝる意味に於ける大語面的なるものが媒語的なる「時」によつて、小語面的なるものと結合し、一つの一般者を形成すると考へられた時、それが自然界と考へられる。自覺的一般者に於ては、既に主語的なるものが述語面の底に超越するから、大語面的一般者が「時」によつて之を包むと云ふことはできない。意識現象界に於ては嚴密なる意味に於て客觀的法則といふ如きものは考へられない。併し志向といふことが意識の性質であり、志向するといふことは、判斷的一般者の底に超越するものが述語面にその影を映すと云ふことであるとするならば、意識現象は「時」を離れて成立せない。唯、意識現象の「時」は自然現象の如く過去と未來とが大語面的に結合することができず、小語面的なるものを基礎として大語面的なるにも結合しよう傾向を有するのである。歴史的時といふのも、かゝる意味に於ける「時」の極限にあるものである。歴史に於ては殆んど大語面的なるものは成立せない。然るに、自覺的一般者を越えて知的直觀の一般者に於てあるものに至つては、全然時を超越したものと云ふことができず、時によつてその存在が限定せられるのではなく、唯、時に於てあるものはその影を映すまでゝある。此故に、意識一般の内容といへども、何人が考へると否とに關せず

それ自身に於てあると云ふことができる。唯意識一般は單に形式的なる叡智的自己として、それ自身の内容を有せざるが故に、そのイデア的内容即ち叡智的ノエマが直に實在の内容であり、尙所謂實在界を以て直にその顯現と見做すことができる。之に反し、藝術的直觀に至つては、もはや所謂實在界を以て直にその顯現と見做すことはできない、美は假相と考へられる所以である。併し藝術的直觀に於て叡智的ノエシスと叡智的ノエマとが中和の状態に於てあり、ノエマ的なものがノエシスの中に消え失せるのではないから、ノエマが尙意識一般の叡智的ノエマたる所謂實在界を離れない、實在的なものがその表現となるのである。然るに自己自身を見る道德的良心に至つては、そのノエマは全然知的直觀の一般者の抽象面ともいふべき意識一般の意識面を超越して、之に於て映されると云ふ意味をも有たない。善のイデアは實在界に映されると云ふ意味すら有たない、實在的なものがその表現となるも云ふことができないのである。一般者の限定作用が「於てあるもの」に移つた時、一般者の方向には唯、法則が見られる如く、ノエマ的方向には唯、道德法といふものが見られるのである。家族とか國家とかいふ如き道德的實在と考へられるものも、藝術的作品の如くイデアの影像とか表現とかいふものではない、有るものはすべて當爲

である。一般者に於ける最後の有るものとして働くものに於て、述語が主語となり、主語が述語となる如く、又意志に於て志向せられるものが志向するものとなる如く、有るものは當爲であり、當爲的なものが有るものである、道德的實在といふ如きものは永遠に未完成なる藝術品の如きものである。斯くノエシスどノエマどが相離れ、自己自身の内容が知的直觀のノエマとして見られない時、唯ノエシス的方向に自由意志といふものが考へられ、カントの如き形式的道德が成立するのである。道德的自己に於ては、いつも形式と内容どが相對立する。併し道德的自己は知的自己の如く單に形式的有として、他の内容を見て居るのではない、良心は自己自身を見て居るのである。道德的實在として客觀的に現れるものは自己自身の内容に外ならない、かゝる意味に於ては、叡智的自己として、藝術的直觀の自己と同じである、唯、何處までもそれが十全なる表現を得ないと云ふのである。内容なき道德は眞の道德でない、ノエマ的關係なき叡智的自己はない、良心はノエシス的に自己自身を見ることによつて、ノエマ的に法則的な道德界が成立するのである。唯、その内容其者が直に見られない、即ち叡智的ノエマとして成立せないから、意識的自己の立場からしては、道德的自己は行爲的自己と考へられ、ノエシスの超越の方向に道德的意志が考へら

れ、ノエマ的超越の方向に客觀的德道界といふものが考へられ、形式善と内容善とが對立するのである。併し道德的世界は道德的自己の創造せるものである、道德的行爲の目的は道德的自己自身にあり、自己自身の世界を創造するにあるのである。睿智的世界と所謂實在界との關係については尙詳論せねばならぬと思ふが、今は唯その大體に止めて置く。

七

以上述べた如く、私は意識の超越的志向性に基いて、自覺的一般者に於てある最後のもの、即ち我々の意識的意志をも越ゆることによつて、知的直觀の一般者といふものを考へ、之に於てあるものとして、ノエシスの方向に知情意の三段の睿智的自己を考へるのである。睿智的自己とは自覺的一般者を越えてあるものとして、かゝる三段の超越が考へられると思ふのである。而して意志を越ゆると云ふことは、自己が考へられた自己を越ゆることであり、意識が意識せられた意識を越ゆることであり、それは所謂主客合一の知的直觀に至ることであるから、睿智的自己とは直觀的に自覺するもの、即ち直に自己自身を見るものである。從來の哲學に於ては單にノエマ

的超越のみが考へられるから、知的直観といへば、それまでいあるが、私はノエシスの超越を考へることによつて、自己自身を見るものを右の如く三段に區別し得ると思ふのである。而して自己自身を見るものゝ内容といふのは、我々の意識作用に對しては、超越的對象と考へられるものであり、イデヤと考へられるものであるから、三種の睿智的自己とは眞のイデヤを見るもの、美のイデヤを見るもの、善のイデヤを見るものである。單に知的なる睿智的自己とは、知的自覺の如く形式的自己であり、未だ眞に睿智的自己の内容を見るものではない、即ち直に自己自身の内容を見るものではない、眞理はイデヤの抽象的なものである。眞に自己自身の内容を見るには、情的ノエシスに至らねばならない、我々は藝術的直観に於てイデヤ其者を直観するのである。更に意志的ノエシスに至つては、それは自己其者を見る所謂良心であり、イデヤは實踐的となる。我々が意志を越えて睿智的自己の立場に立つ時、之を意識的自己の立場から見れば、それは無限に創造的と考へられねばならない。知的睿智的ノエシスであつても、それは所謂意識一般として構成的と考へられる、唯未だ自己自身の内容を見ざるが故に單なる認識主觀と考へられるのである。藝術的直観に於ては、見ることは作ることであり、作ることを見ることである、最も適當なる意味に於

て自己は創造的である。叡智的意志の立場に至つては、イデアはもはや客觀的に見られるものでない、自覺的一般者に於てある最後のものとして、意志は志向せられるものが志向するものであり、その内容がノエマ的に限定することができない如く、叡智的意志に於ては、そのイデアは知的直觀の對象ともなるものでない。イデアは單に實踐的として、ノエシスの方向に於て自由意志といふものが考へられる、叡智的自己は自由なる人格と考へられるのである。かゝる見方よりすれば、知的直觀の一般者に於てあるものはすべて人格的と考へられ、イデアの世界は行爲的自己の對象界として、善のイデアが最高のイデアとして、統制的意義を有すると考へることもできる。私は具體的な眞のイデアは人格的であり、個性的でなければならぬと思ふものである。知的直觀の一般者に於て最後のものとして、叡智的人格は個性的でなければならぬ、かゝるものゝ内容としてイデアは個性的でなければならぬ、すべての個性的なるものゝ根源はそこにあるのである。意識一般の内容と考へられる眞理のイデアは、知的自覺の意識面に映されるものゝ如く、個性的なるイデアの影でなければならぬ、此故に一般的なると共に抽象的である。唯眞に個性的なる人格的イデアは見られるものとして、ノエマ的なイデアの性質をも有せない。

我々は唯美のイデヤに於て個性的なるイデヤを見るまでである。眞に個性的なる人格的イデヤはノエマ的に見られないものであるから、單に法則的として善のイデヤは統制的と考へられるのである、恰も推論的一般者に於ける大語面的性質を有するのである。

私は右の如くにして知的直觀の一般者に於てあるものを限定すると共に、それ等の關係を明にし、之によつて種々の哲學にそれらの立場と權利とを與へると共に、その相互の關係を明にし得るかと思ふ。カント哲學の立場は知的なる叡智的自己の立場なるが故に、單に形式的自己の内容たる眞理を論ずる以上に出ることができない、カント哲學が認識論に止まつた所以である。カントは良心を基礎として叡智的なるものを考へたが、遂にこの二つの立場を結合することはできず、又叡智的なるものゝ内容、美とか善とかいふものゝ内容を限定する原理を與へることもできなかった。現今の現象學の立場は前に云つた如く表象意識の立場を叡智的ノエシスの立場に深めたものに過ぎない、知的叡智的自己の一面のみを見て居るのである。フイヒテは知的自覺の意味を深めて行爲的自己に至り、意志的なる叡智的自己の立場に立つものと云ふべく、シエルリングは藝術的直觀を基として情的なる叡智的自己

の立場に立つものと考へることが出来る。ヘーゲルの哲學に至つては、理性の意味を知的直觀の一般者の限定にまで進めて、すべてを包括したと考へることが出来るが、何處までも知的自己の立場を深めたものとして、知的直觀の一般者のノエマ的限定の立場を出ないと云ふことが出来る。すべてノエマ的超越を基として考へられたものであつて、ノエシス的なものの限定の原理が明にせられてゐない。フイヒテの意志、シエルリングの直觀と云つても、作用的であつて意志するもの、見るものが考へられない。従つてかゝる考へ方からは遂に個性とか個人的意志自由とかいふのは出て來ない(シエルリングの晩年の著作に於て、かゝるものが考へられたとしても、充分にその論理的根據が明にせられたとは思はない)。元來、カントの立場をノエマ的に超越して叡智的世界に入ると云ふことは、批評哲學の立場を破ることであつて、所謂形而上學に陥つたと云はれても己むを得ない。カントに於てもノエシス的限定の原理は與へられないが、カントは單に形式的なる叡智的自己の立場を守つて、それ以上に出なかつた。そこにカント哲學の特色があつたと思ふ。叡智的なものを論ずるには、先づノエシス的限定の根據が明にせられなければならない、我々の意識との關係が明にせられなければならない。加之、叡智的自己のいづれかを基として、

その他を論じようとするれば一方的なるを免れない。眞、善、美の内容及び關係は唯、深くノエシスの方向を顧みることによつてのみ明にせられ得ると思ふ。

私は判斷的一般者を包むものとして自覺的一般者を考へ、自覺的一般者を包むものとして知的直觀の一般者といふものを考へた。知的直觀の一般者から見れば、之に於て包まれたるものは、之によつて基礎づけられたものである。知的直觀の一般者に於て叡智的ノエシスと叡智的ノエマとが對立し、叡智的ノエシス即ち我々の眞の自己がノエマ的に限定せられるかぎり、意識的自己といふものが限定せられ、即ち自己が對象化せられ、自覺的一般者といふものが限定せられるのである。之に反し、單にノエマ的限定の立場に立てば、ノエシス的なものもノエマ的なものの中に萎縮し、主語となつて、述語とならない基體といふ如きものが限定せられ、判斷的一般者といふ如きものが限定せられるのである。唯、私の考ではノエマ的限定はノエシス的限定によつて可能であると思ふから、形式上、自覺的一般者は判斷的一般者を包むと考へるのである。併しノエシス的に意識的自己といふものが限定せられるかぎり、それは超越的ノエシスの對象界を含むことはできない、單に之を志向するのみである、嚴密なる意味に於ては、唯、内部知覺に屬するものゝみを含むと云ふことができ

る。之に反し、單にノエマ的限定からノエシスの限定は出て來ない、判斷的一般者の限定から意識的なるものは考へられないのである。唯、我々が嚴密なる意味に於て知識と考へるものは、判斷的一般者の限定によつて成り立ち、之との關係に於て考へられるのであるから、それ以上の知識を考へるにしても、判斷的一般者の限定に準して考へねばならない。私が判斷的一般者から出立して、之を超越して行くと云ふのは、かゝる關係を明にする爲に外ならない。判斷的一般者の限定が眞理として、それ自身に客觀性を有つ、即ち判斷的一般者が自己自身の中に對象を含むと云ふことは、既に判斷的一般者が知的直觀の一般者に於けるノエマ的限定なることを意味して居るのである。斯く見ることによつて、その中に一層大なる一般者への推移が潜在して居ると云ふことができる。判斷的一般者といふのは、自己が基體に萎縮すると共に、知的直觀の一般者自身がノエマ的に萎縮せるものである。叡智的世界と云へば、我々の現實を超越した天上界の如く考へられるかも知らぬが、斯く考へるのは、唯ノエマ的超越によつてイデアの世界を考へるからである。自由なる人格として我々は現實に叡智的世界に於て生きて居るのである。かゝる立場からは所謂實在界とは考へられた抽象的世界に過ぎない。

右の如く知的直觀の一般者が自覺的一般者を含み、又更に判斷的一般者を含むと考へられるのであるが、私は知的直觀の一般者を以て最後のものと考へるのではない。意識的自己を超越するとは云へ、尙超越的ノエマと超越的ノエシスと對立し、知的直觀を以てその限定となす一般者は眞に最後の有るものを包むものではない。自己自身を見るものに於て、見るものと見られるものが對立するかぎり、尙眞に自己自身を見るものでない。是故に道德的自由意志は有るものとしては自己撞着である。判斷的一般者に於ける「働きの如く、自覺的一般者に於ける意志の如く、限定せられた一般者に於てある最後のものとして、自己を越えて矛盾の統一をその背後にあるものに求めなければならない。道德的自己があると云ふことは、自己を不完全として何處までも理想を求めることであり、良心が鋭くなればなる程、自己を惡と感ずるのである。かゝる矛盾を越えて眞に自己の根柢を見るには宗教的解脱に入らなければならない、徹底的に自己を否定することによつて自己の根柢を知るのである。その境地に於ては、善もなければ惡もない、睿智的自己を尙ノエシスの方向に越えることによつて、自由意志をも脱却し、そこには罪を犯す自己もない。善のイデアといふも形なきものの影に過ぎないのである。

八

私は宗教的意識といふものを明にするため、尙一度知的直觀の一般者に於てあるものに返つて考へて見よう。睿智的自己とは自己自身の内容としてイデアを見るものと云つた。そのノエマ的性質は斯く考へ得ると思ふが、そのノエシスの性質は如何なるものであらうか。自己自身の内容を直觀するものとは、如何なるものであらうか。我々が意識的自己の底に超越して睿智的自己に至るといふことは、所謂内部知覺の意識界を越えて、超越的對象を自己の内に包むことであり、自己が直に客觀的なるものを意識することであるから、主客合一と考へられ、知的直觀と考へられるのである。而してそれは我々の意識自己の根柢に深き自己自身の内容を見ることであり、その極直に自己自身を見ることであると云ふことができる。併しかゝる考へ方は、尙ノエシスをノエマに卽して考へるのであつて、作用的見方たるを免れない。自己は單に作用ではなく、作用するものでなければならぬ、否、作用を内に包むものでなければならぬ。自己が自己の底に自己を超越するといふことは、自己が自由となることである、自由意志となることである、自由意志とは客觀的なるものを自己の

中に包むことである。併し意識一般の如く對象が尙自己自身の内容でない場合は、自由なる自己とは云はれない。眞に自由なる自己は自己自身の内容を有たねばならない（内容なき意志は意志ではない）、而も之を自己自身の内容として内に包むものでなければならぬ、即ち自己自身の於てある場所となるものでなければならぬ。超越的自己が自己の中に自己の内容を直觀することが知的直觀である、即ちイデアを見ることである。併しかゝる直觀には、そのノエシスの方に於て、何處までも隨意的なるものが残されねばならない、然らざれば、超越的自己のノエシスの超越の意味はなくなるのである。叡智的自己はイデアを自己自身の内容として、何處までもイデアを見、イデアを實現し行くと考へられると共に、何處までも反價值への方向を含んだものでなければならぬ、反價值への方向を含むといふことが叡智的自己のノエシスの獨立性を現するものである。超越的自己が意識的自己の立場に墮することが惡と考へられるが、肉其者は惡ではない、肉に向ふ意志が惡なのである。我々の自己が意識的自己即ち心理的自己の立場に立てば、その欲する所は善でもなく惡でもない、動物は善でもなく惡でもないのである。惡なる意志とは何であるか。それは隨意的意志である、イデアを否定し、無に向ふの意志である。自己自身の内容を

否定すると共に、之を充すに意識的欲望を以てする時、肉は惡となるのである。すべて反價值的なるものはノエマの方向に見られるのでなく、ノエシスの方向に見られるのである。叡智的自己が自己自身の内容を否定し、意識的自己の内容を以て自己を充す場合、反價值的なるものが現れるのである（反價値可能といふことが叡智的ノエシスを現するものである）。叡智的世界に於てノエシスの方向に立つものは、いつも反價值的である、自己自身の底に深く見るもの程、惱める自己でなければならぬ、惱める魂こそ叡智的世界に於ける最も深い實在である。叡智的世界に於てある最後のものを右の如く考へるならば、かゝる自己を超越して宗教的意識に至ると云ふことの意味を明にすることができらう。自己自身を越えて、何處までもノエシスの方向へ、深く自己自身を見て行く自己が、眞に自由なる自己であり、それはイデヤを見る自己の根柢を見るものである。單にイデヤを見るものとしては、叡智的自己のノエシスの獨立性を表すことはできない。イデヤを見るものといふのは、ノエマに即して考へられた自己であつて、一般的なる自己に過ぎない。眞にノエシス的な叡智的自己は、個性的自由でなければならぬ、自由其者でなければならぬ。意志が自己の内容を意識面に映し、意志の内容が志向の對象となると共に、意志自身は何

處までも志向せられるものではなく、却つて志向するものとして自己自身を意識する如く、叡智的自己は一方に超越的意識面に於てイデアとして自己の内容を映すと共に、自己自身は何處までも反イデア的であつて、イデアを見るものとして自己自身を知るものが居るのである。是故に、意志の矛盾の如く、自己を見ること深ければ深い程、自由なれば自由なる程、自己自身の矛盾に苦まなければならぬ。かゝる矛盾を脱して、眞に自己自身の根柢を見るのが宗教的意識である。叡智の世界から宗教的意識の世界に至るには、そこに意識的意志を超越して意識一般の自己に至つた如き一種の超越即ち廻心がなければならぬ。斯くして我々は眞に自己自身の矛盾を脱し、自己自身の根柢を見るのである。叡智的性格といふのはノエマ的に即して見られた自己の影像に過ぎない、對象化せられた自由である。我々は叡智的性格を追求することによつて、眞の自己其者を見ることはできない、いつも自己の影を見て居るのである、自己は益自己の矛盾に苦むのみである。藝術的直觀に於てはノエシスがノエマに没し、叡智的自己がノエマ的に限定せられた自己自身を見るが故に、自己自身の矛盾を脱して宗教的解脫に類するものが感じられる。併し藝術的直觀に於ては限定せられた自己が見られるのであつて、自由なる自己其者が見られるので

はない。自由なる自己其者を見る良心は深い自己矛盾でなければならぬ、自ら良心に恥ぢないなど云ふものは良心の鈍きを告白するものである。深い罪の意識こそ最も深く自己自身を見るものゝ意識である。深く自己自身の中に反省し、反省の上に反省を重ねて、反省其者が消磨すると共に、眞の自己を見るのである。深い罪の意識の底に沈んで悔い改める途なきものゝみ神の靈光を見ることが出来る。

睿智的世界に於てある最後のものが自己自身の中に矛盾を含むと云ふことは、同時に自己の中に自己超越の要求を藏することを意味する、即ちその背後に之を越えたものゝあることを意味するのである。一般者が更に之を含む一般者に於てあり、後者によつて裏附けられた時、前者に於てある最後のものが自己自身の中に矛盾を含むものと考へられるのである。此故に知的直觀の一般者といへども、尙最後のものではない、更に之を含む一般者即ち絶對無の場所といふ如きものがなければならぬ、それが我々の宗教的意識と考へるものである。宗教的意識に於ては、我々は心身脱落して、絶對無の意識に合一するのである、そこに眞もなければ、偽もなく、善もなければ、惡もない。宗教的價值といふのは價值否定の價值である。價值否定の價值と云へば、背理の如く思はれるかも知れぬが、所謂價值といふのはノエマ的方向に考

へられた對象的價值である。之れに反しノエシス的方向に無限の超越を考へ得るならば、即ち存在價值といふものを考へ得るならば、かゝる方向にあるものは、いつも當爲的價值の否定の立場に立つものでなければならぬ、存在價值は當爲價值を否定する毎に高まるのである。例へば、主語となつて述語とならない基體より、かゝる主語的限定を否定する意識的自己は一層深い實在であり、その中でも知的自己よりも意志的自己は一層高い存在價值を有つと考へ得るであらう。所謂價值哲學は構成的主觀の立場に立つて對象的有の限定を論ずるが、顧みて自己自身の限定する論理的形式を有たない。對象的有は既に價值であつて眞の有ではない、當爲に屬する有である。かゝる立場からは、眞の有を限定し、存在價值といふ如きものゝ論じ様はない。之に反し、私は知るといふことを一般者の自己限定となす立場から出立し、具體的一般者の背後に超越的述語面即ち場所といふものを考へ、かゝる場所は更に之を包む大なる一般者によつて裏附けられ、之に於てあるものとして、場所其者の直接限定を有るものゝ限定形式と考へるのである。例へば、判斷的一般者が自覺的、一般者に於て包まれるものとすれば、判斷的一般者の超越的述語面といふものが直に意識面となり、意識面に於てあるものは、判斷的一般者の立場から見ては、場所自身の無

媒介的なる直接限定として、單に有るものと考へられ、非合理的なるものと考へられるのである。推論式的に於て、小語面的限定といふものが、それに當ると考へることができる。超越的述語面の自己限定を知ると云ふことゝすれば、知るものが知るもの自身を限定することである。自覺的一般者が知的直觀の一般者に包まれ、之に於てあるといふ場合に於ても、自覺的一般者の場所、即ち超越的意識面といふものが、直に知的直觀の一般者が自己自身を限定する抽象的限定面であり、之に於てあるものを自覺的意識の立場から見れば、自由なる自己の内容として隨意的と考へられると共に、自由といふことが自己の實在性を表すものでなければならぬ、意識的自覺は之によつて與へられるのである。右の如くにして非合理的なるものより隨意的なるものは一層深い實在であり、超越的場所の直接限定といふ方向に深くなる。ことが、存在價值の高まることである。私の存在價值といふのは、對象認識とは逆に、反省的自己の方向に見られる價值である。かゝる考へ方からして、知的直觀の一般者に於てある最後のものとして「迷へるもの」は、宗教的意識によつて知的直觀の超越的場所に於てあるものとして、我々が概念的に限定し得られるかぎり、最も深い意味に於ての實在と云はねばならない、迷へるものこそ天使にもまして最も神に近いも

のである。ノエマ的には、叡智的自己の内容として眞、善、美以上の価値は見られないであらう。併し知的直観の一般者が絶対無の一般者によつて裏附けられるかぎり、迷へる自己といふものが見られるのであり、尙一步ノエシスの超越が残されるのである。そこに反價値的価値の極致として宗教的価値といふものが考へられるのである。それで、宗教的価値とは自己の絶對的否定を意味するのである。絶對に自己を否定して、見るものなくして見、聞くものもなく聞くものに至るのが宗教的理想である、之を解脱といふのである。

ウインデルバントは「神聖」„Das Heilige“に於て、眞、善、美の外に價値の内容はないと云ひ、宗教的價値は唯此等の價値意識に共通なる根本的關係即ち Antinomie des Bewusstseins に求めねばならないとなし、良心によつて現される價値意識の形而上學的實在性を神聖と考へて居る。要するに、最高價値の實在に對する我々の感情が宗教的感情となるのである。私ばかり考へ眞、善、美の價値をその極致にまで進めたものであつて、之によつて眞の宗教的價値を導き出すことはできないと思ふ。實在性といふことから何等の價値性は出て來ない。實在の價値はその荷ふ價値によつて價値附けられて居るのである。若し實在性といふことに眞、善、美と異なつた價値があるとするれば、そこに異なつた價値の意味がなければならぬ。

九

以上述べた所によつて、私は宗教的意識の立場といふものを明にし得たと思ふ。

知的直觀の一般者に於てあるもの、即ち叡智的世界は尙ノエシスとノエマとの對立の世界であり、ノエマ的に限定せられ得るかぎり、一般者は尙限定せられたものである。此故に之に於てある最後のものは、自己自身に矛盾を含むものであつて、未だ眞に最後のものを包むと云ふことはできない。眞の自己の根柢はかゝる世界に於てあるのではない、かゝる世界をも越えてあるものでなければならぬ。知的直觀の一般者をも包み、我々の眞の自己がそれに於てあると考へられるものは、絶對無の場所とも云ふべきものであつて、即ち宗教的意識と考へられるものである。知識の限定の根本形式としては、判斷的一般者を取らねばならない、意識の志向性といふことも、述語的方向への超越として論理的意義を有し、意識せられたものが判斷的知識の内容として考へられるのである。知的直觀といへども、それが尙意識の志向性を脱しないかぎり、概念的知識に關係を有つと云ひ得るのである。之を越えて絶對無の場所に於てあるものに至つては、もはや何事をも云ふことはできない、全然我々の概念的知識の立場を越えたものである、言語絶し思慮を絶した神祕的直觀の世界と云ふの外はない。元來我々の概念的知識といふのは一般者が限定せられることによつて成立するのである、知るものが直に知るものを限定することによつて成立する

のである、その根柢には絶對のノエシスの超越がなければならぬ（一般概念とは限定せられた私である）。かゝる方向を體驗とか直觀とか云ふならば、宗教的意識とはかゝる方向の極限に於て現れるのである、宗教的意識内容の限定は判斷的一般者の限定に準へて論することはできない、唯體驗によると云ふの外はない、絶對無の一般者の限定として概念的には無媒介なる限定と考へるの外はないのである。而も翻つて考へれば、最後の有を限定するものとして、嘗て非合理的と考へられたもの、自由と考へられたものは皆その根柢を此に有するのである。

宗教的意識其者の内容は、斯くして宗教的體驗によると云ふの外ないが、すべて一般者が一般者に於てあり之に包まれると云ふ時、包まれた一般者の超越的場所が包む一般者の抽象的限定面となる、即ち後者に於てあるものゝ影を映す場所となるのである。例へば、自覺的一般者が知的直觀の一般者に於てあり、之によつて包まれた時、所謂意識一般の意識面といふものが考へられるのである。之と同様の意味に於て知的直觀の一般者が絶對無の一般者とも云ふべきものに於てあり、之によつて包まれた時、睿智的世界と考へられたものは神よの意識に於てあるものと考へられるのである。神とは意識一般と同様の意味に於て、睿智的世界の超越的主觀である。

而して所謂經驗界が意識一般の綜合統一によつて構成せられたものと考へられる如く、睿智の世界は神によつて創造せられ、神によつて支配せられるものと考へられる。斯くして宗教的世界觀といふものが成立するのである。心理的自己を超越することによつて、意識一般の超越的主觀が考へられる如く、神は睿智的自己のノエシ스의超越によつて考へられる超越的主觀なるが故に、神は絶對的眞善美の統一として、睿智的自己といへども神の前には平伏せざるを得ない、絶對歸依の感情が宗教的感情と考へられる所以である。唯、自己を亡すことによつてのみ、神に於て生きると云ふことができるのである。併し私はかゝる宗教觀は尙甚深なるものとは考へない。意識一般が睿智的自己としては尙自己自身の内容を有せない如く、未だ眞の宗教的直觀に達せない、唯、睿智の世界に即して考へられた宗教觀たるに過ぎない。

眞に絶對無の意識に透徹した時、そこに我もなければ神もない。而もそれは絶對無なるが故に、山は是山、水は是水、有るものは有るが儘に有るのである。萬仞崖頭撒手時、鋤頭出火燒宇宙、身成灰燼再蘇生、阡陌依然禾穗秀と云ふべきである。

私は既に宗教的立場を明にした。終に臨んで哲學的立場に就いて一言して見よ

う。宗教的立場は全然、我々の概念的知識を超越した立場でなければならない。宗教的體驗の風光については、宗教家に譲るの外はない。唯、知ると云ふことを一般者の自己限定と考へ、かゝる考を絶對無の一般者にまで押し進めた時、如何なる意味にても限定を超越すると共に、そこに絶對無の場所として尙映すと云ふ意味が残されねばならぬ、それが我々の知識の根本的立場となるのである。我々の心は最後に於て唯映す鏡と考へられるのである。ヘーゲルが *So denn der erste Wille ein Ungerund ist, zu achten als ein ewig Nichts, so erkennen wir ihn gleich einem Spiegel, darin einer sein eigen Bildnis sieht, gleich einem Leben* と云つたものは、かゝる消息を傳へるものでもあらう。此の如きすべての知識を超越した知識の立場から、種々なる知識の立場及びその構造を明にするのが純なる哲學である、即ち絶對無の一般者の立場から之に含まれたる種々なる一般者の限定其者を明にするのである。一般者の自己限定といふことが、廣義に於て理性と云ひ得るならば、理性自身の自己反省とも云ひ得るであらう、カントの批評哲學の立場はその特殊なる一つの場合と考へることが出来る。宗教的體驗其者の立場に於ては映すといふ如きことも残されない。宗教を絶對無の意識の立場と云つたことも、既に宗教を哲學の立場から考へて居るのである。唯、哲學の立場から云へば、

宗教を斯く考へねばならぬと共に、そこに宗教と哲學との接觸點があると云ふのである。哲學的立場は知識の立場として、藝術や道德の立場に比して抽象的と云はねばならぬが、その叡智的自己の立場をも越えた立場といふ點に於て、哲學は藝術や道德の立場をも越えた立場でなければならぬ。否、宗教的世界觀をも越えたものでなければならぬ。向に宗教的世界觀の成立する立場を、絶對無の一般者に於ける意識一般の立場に比したが、哲學の立場は宗教的自己の立場から叡智的世界を省み、その内容を内容とする立場ではなくして、宗教的自己が自己自身の内への反省の立場である、絶對的自己が對象界を構成する立場ではなくして、自己自身の内へ反省する立場である、絶對的自己自身の自己反省の立場である。斯くして哲學に於て知識其者の成立及び構造が論せられるのである、批評哲學は意識一般の立場によつて成立するのではなく、意識一般を反省する立場に於て成立するのである。

一般者の場所が超越的として限定すべからざるものとなること云ふことは、固、その背面に於て自覺的なものが成立すると云ふことを意味する。自覺的なものは、自己自身を反省し、自己の内容を限定して行くものである。自覺的一般者に於ての如く、自覺的なものが自己の内に反省して、自己の内容を限定することができる

かぎり、具體的、自己の内容を見ることができ、叡智的自己に於ても尙、然云ふことができる。併し之を越えた時、一般者は絶対に限定すべからざるものとなると共に、之に於て、ある自覺的自己の内容としては、唯、自己自身の限定形式あるのみである、即ち自覺を自覺するまでいある、知識が知識自身を反省するまでいある。宗教的世界觀といふ如きものは、唯、叡智的世界の内容を宗教的、自己の立場から見ただものに過ぎない。宗教的自己、其者の自省の内容ではない。宗教的立場に於て意識的自己が消滅すると共に、もはや之によつて志向せらるべき内容はなくなるのである、唯、内省的方向に於ては形式的自覺の内容、即ち知識の根本的形式が残されるまでいある。無にして有なる絶對無の意識の相は、知的自己の立場としては、唯、知識自身の自省に於てのみ見ることができ、そこに哲學の立場があるのである。私は徹底的批評主義の立場から、知識成立の根柢を明にし、種々なる知識に各自の立場と權利とを與へると共に、相互の關係と秩序とを明にしようと思ふものである。カントの批評主義には、その出立點に於て、尙獨斷的なものが殘されて居たと考へざるを得ない。上に述べた様な意味に於て、叡智的存在の世界が論せられることが、形而上學であると云ふならば、私は形而上學といふものにも、その成立の根據と權利とを與へたい。所謂形

而哲學の排斥すべきは、種々なる知識の立場が明にせられないと共に、種々なる有の意味が混同せられた點にあると思ふのである。併し哲學の立場と云ふこと就いて後日更に論ずる所があるであらう。